

切字は創造の突破口

鈴木真砂女

久保田万太郎先生の昭和二十二年の作に次の句がある。

旅びとののぞきてゆける難かな

この句を読んで、多少とも古典に通じている読者はすぐさま、

旅人の窓よりのぞくひひなかな

という江戸時代の俳人加舎白雄の句を思い出すにちがいない。きわめて類似した句である。発想においても類想と疑われてもやむをえないが、類似句ではあるが類想ではない。

その根拠をここで改めて再吟味してみると、「窓より」と「ゆける」に微妙なニュアンスの違いがあることが解る。白雄の固定した景に対して万太郎のほうは動きのある景となっている。時間の推移を使って抒情味をにじませているのだ。

歳時記にも載っている白雄の句を、万太郎は知らぬはずはない。承知のうえで作ったのだ。その裏付けとして、万太郎句には次のような擬った前書きがついている。

夕暮かたの浜へ出て

二上り節を唄へば

昔もかく人のうたひ候と
よぼよぼの盲目がいうた

さても昔も今にかはらぬ

人の心のつらさ、懐しさ、悲しさ

—— 万太郎

木下太太郎の有名な詩集『食後の唄』の中の「石竹花」と題する詩の一節である。ついでに記すと、このあと「磯の石垣に／うす紅の石竹の花が咲いた」と二行加えて詩は完結している。万太郎にとっては「石竹の花」は必要がなかったのである。浜辺で唄う盲人と「人の心のつらさ、懐しさ、悲しさ」だけが前奏効果として必要だったのだ。「のぞきてゆける」には年々歳々人同じからずの感慨がこめられ、「人の心のつらさ、懐しさ、悲しさ」と照応させているのである。

万太郎にはさらに極端な類似句がある。

初午や煮しめてうまき焼豆腐 久保田万太郎

初午や煮つめてうまき焼豆腐 小沢 碧童

碧童、昭和四年、万太郎、昭和二十七年の作である。念のため『広辞苑』を参照すると次のように記してあった。

にしむ「煮染む」 よく煮て汁をしみ込ませる。

につむ「煮詰む」 煮汁のなくなるまで煮る。

すなわち「し」と「つ」には大きな差があるので、同じ「うまき」

でも、にじみ出てくる汁の有無という両極となっているのだ。

万太郎はいずれの句も承知で作り、「引」込めるべきではないか」という安住敦先生の助言にもかかわらず両句とも、自信をもって句集に発表している。先行句を超えたという自信を持っているから臆する気などさらにない。作家の自信と責任の重さを示す挿話である。これらの句についてのやりとりは、安住敦著『市井暦日』に詳しい。

戸一枚開けて空見る夜寒かな 靱山 梓月
田一枚植ゑて立去る柳かな 松尾 芭蕉

この二句は内容は全く違うが、句型の構造は全く同じである。類型句どころか同型句である。十七音しかない俳句の型は、いかに組み替えても数字的に同型化は免れない。

しかしながら、一字一音のもつ雰囲気と、それらの組み合わせのもとたず感情は無限大に近い。盗作ではないかぎり、作者のいのちの息吹が伝わってくるものである。

人間たちそのものが、生まれ代わり死に代わり、愛別離苦を繰り返していること自体、広い意味で類想、類型であろう。子は親の本歌取りなのである。それゆえに理解と共感がしやすいとも言えよう。要はその作者にとって、いかに風景や人生を率直に受け止めた発想で詠い上げることにかかわると思う。

同じ季語を取り上げること自体、すでに類型を招いているわけで、反面絶好の共感基盤を醸成しているのだ。

つまり俳句は、十七音と季語と二つの大きな類型、類想の要素をはらんだところから出発していると言える。二つの敵しい枷にあらがうことなしには、生身の新鮮な感動で発想できないであろう。

それでは十七音、季語という二つの枷を脱して、類想を脱する手だてはあるのだろうか。

俳句はそれに対して立派な知恵をそなえている。すなわち「切字」と助詞である。

俳句の三大条件の最後の一つ「切字」こそ、不完全な日本語を逆手にとった創造への突破口である。類型より類想を警戒しよう。

月刊 雨月 主宰 大橋敦子

誌代一年七二〇〇円
振替番号大阪三九〇四一 竹腰敏男

発行所
〒565 吹田市千里山西5-8-1
雨月発行所
編集部
〒665 宝塚市桜が丘22-10
竹腰 八 柏